

## 南湖および瀬田川下流域における延縄による ニホンウナギとチャネルキャットフィッシュの採捕率

石崎 大介

### 1. 目的

近年、県内において特定外来生物チャネルキャットフィッシュ（以下、チャネル）の確認数が増加している。本種の増加が著しい霞ヶ浦ではさまざまな漁業被害が生じていることから、本種が琵琶湖でも拡散し増加した場合、相当な漁業被害が生じると予想される。しかしながら、滋賀県内での漁業被害の実例は報告されていない。そこで、延縄で漁獲され琵琶湖の最も重要な水産物の1つであるニホンウナギ（以下、ウナギ）とチャネルの延縄での採捕率について、本種の多い瀬田川洗堰より下流の瀬田川（以下、瀬田川下流）とまだ確認数の少ない南湖において比較した。

### 2. 方法

ウナギを対象として延縄漁業を操業している5または6人の漁業者に、2015年から2021年の4月から12月の操業日、操業場所、投入針数、採捕魚種、採捕個体数について漁獲日誌への記入を依頼した。南湖および瀬田川下流での操業について、操業日ごとにチャネルとウナギの採捕個体数をそれぞれ針数で除して針100本あたりのCPUEを算出した。それらの数値を平均して両水域ごとに両者で比較した。

### 3. 結果

瀬田川下流および南湖でそれぞれ112操業と448操業の、合わせて560操業の有効なデータが収集された。南湖でのウナギの平均CPUEは2.11であり、チャネルの平均CPUEの0.05と比較して有意に高かった（t検定、 $p < 0.01$ ）（図）。瀬田川下流ではウナギの平均CPUEは0.07であり、チャネルの平均CPUEの

2.02と比較して有意に低かった（t検定、 $p < 0.01$ ）。瀬田川下流域にはほとんどウナギが放流されていないことや、両種の延縄へのかかりやすさの影響も考えられるが、現実として瀬田川下流域ではチャネルばかりが採捕されウナギがほとんど採捕されない状況になっていることから、チャネルを駆除したうえでウナギを放流することも必要である。

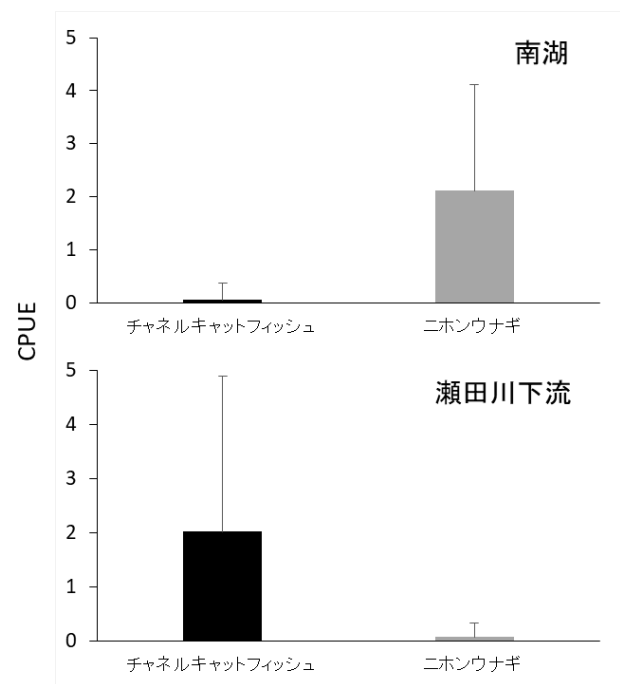


図1 チャネルキャットフィッシュとニホンウナギのCPUE